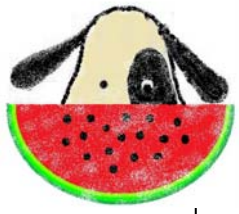
NPO 法人 おおさかこども多文化センター　Newsletter

OKoTaC 通信　NO.6

オコタック

2012 年 8 月 10 日発行



目　次

NPO 活動報告

おおさかこども多文化センター設立１周年フォーラム …… Ｐ２

キリン福祉財団助成事業報告 …… Ｐ３

多文化な子ども@大阪のニュース『WaiWai!トーク Part1』…… Ｐ３

『府外教研究集会』 …… Ｐ４

Air Mail　メキシコ便り⑥　『コスタリカ』 …… Ｐ５

海外にほんご事情『ベトナム・後編』 …… Ｐ６

地域の子ども支援教室から⑥　『サタデースクール』(富田林市) …… Ｐ７

イベント情報 …… Ｐ８

『　聞いてください！私の「こころ」を―――外国から来たこどもたち―　』

～おおさかこども多文化センター設立１周年記念フォーラム～

7 月 16 日 14 時から、天王寺区のクレオ大阪中央において、NPO法人おおさかこども多文化センターの1周年記念フォーラムが開催されました。参加者は約110人。内訳は、会員約 30 人・非会員約 80 人と、新聞などの情報からフォーラムを知り、当NPOが取り組む問題に興味を持ってくださった方々が多数参加されました。

フォーラムの構成は、村上自子理事長の挨拶、来賓の大阪府教育委員会瀧澤公子様のご祝辞に続き、第1部「こどもたちの声」では、外国から来て大阪で育った元こどもたちが、それぞれの想いを、お世話になった支援者の方と共に対話する形で語ってくれました。

1 組目はアティン・ファニーさんと門真なみはや高校の白石素子先生。ファニーさんは、「来日当初は、とにかく人に迷惑をかけてはいけないと気を遣い、理解できていなくても『大丈夫です。わかります』と言うのが癖になってしまっていた。外国から来たこどもたちは皆、自信がゼロからのスタート。褒められれば自信につながるので、できるところに着目してどんどん褒めてあげてほしい」と語りました。2 組目はウォン・カイワェイさんと八尾北高校の橋本義範先生が登壇。2 人のリラックスした雰囲気のかけあいに「漫才コンビのようや」という声も上がりましたが、内容はウォンさんの来日から今までのヒストリーを語る充実したもので、「来日当初、日本人の友人の方から壁を破りにきてくれたのに、自分から壁を作ってしまっていたと思う。今は支援してくれた方々に感謝している。今後はサポートする側にまわりたい」との言葉が印象的でした。

登壇者 3 組目はホンサ・パヌヴィットさんと豊崎中学校の矢嶋ルツ先生です。ホンサさんの中学時代、高校受験に至るまでのエピソード、そして現在から将来のことを、矢嶋先生のホンサさんに自然に寄り添うリードの下、熱く語ってくれました。「こどもは本当にしんどかった時のことは封印してしまい覚えていない」という支援者側のことばが重く心に響き、参加者の中には涙ぐみながら話に聞き入る姿も見られました。

第 2 部では、第 1 部の「こどもたちの声」を受け、色々な分野からのパネラーが各々の視点から、“大阪に住む外国から来たこどもたちの育ちにどう関われるのか、自分のできることは一体何か”について意見を述べ合いました。ファシリテーターにコリアNGOセンターの金光敏さんを迎え、朝日新聞記者の浅倉拓也さん、外国にルーツをもつこどもたちの日本語教室『こどもひろば』事務局長の鵜飼聖子さん、1 部でもお話しくださった白石素子先生、「おおさかこども多文化センター」からは理事の安田乙世がパネラーとして登壇しました。支援者が自由に意見を交わせるこのような機会を多く持ち、多文化共生をキーワードに、ゆるやかに「つなぐ・つながる」関係を創っていくことが「おおさかこども多文化センター」の大切な使命だと改めて認識したフォーラムとなりました。

最後になりましたが、猛暑の中、お越しいただいたすべての方々に心よりお礼申し上げます。今後も「おおさかこども多文化センター」に、温かいご支援をお願い致します！　（O.Y）

おおさかこども多文化センター　活動報告
キリン福祉財団助成金事業『日本語を母語としない親子の社会見学』

今年度のおおさかこども多文化センターの主要企画の一つとして「親子の社会見学」を５回シリーズで開催しています。この6号通信では、企画の趣旨と、今まで実施された第1回、第2回の様子を報告します。

1. 母語とやさしい日本語を通じて、生活に必要な情報を正確に知る。
2. 普段忙しい親と一緒に同じ体験をすることで、親子の会話を楽しむ。
3. 参加者同士の交流を深める。
4. 異国で暮らす家族の悩みを共有する。

第１回目　阿倍野防災センター見学

6 月 10 日、総勢 16 名の参加者で、大地震が起こったら? 地震に備えて何をすべきか？ を学んできました。 火事のとき、煙から逃れるシュミレーション体験をしたりしながら、楽しく学ぶことができました。参加者からは「家族で楽しめて来てよかった」「早速、地震に備えて、非常袋を用意する」など、参加してよかったという感想をもらいました。　（Y･H）

第2回目　朝日新聞社見学

7月24日、「新聞ができるところを見学しよう」ということで、朝日新聞社を訪ねました。参加者は中国語、タガログ語を母語とする中学1年生から2歳半の幼児まで子どもが9人、大人は母親や祖父母、また、おおさかこども多文化センターなどから10人が参加しました。集合は1時半、見学案内担当者による新聞社の説明を聞き、会社の概要を紹介したビデオを見たあと、夕刊降版後の静かな編集局をおしゃべりをしないようにして通過しました。そのあと現在のオフセット印刷の説明を受け、25年前まで使われていた活版印刷の鉛の活字などを見せてもらいながら、廻る輪転機、発送現場などを見学しました。子どもたちは熱心にメモをとり、案内してくれた女性の、クイズを交えた説明に一生懸命に答えながら、とても楽しんでいました。松原市から参加した、喜左上るいさん（小学3年生）は小学校でこの催しを知り、お母さんに仕事を休んで連れて行ってと懇願したそうで「とても楽しかった。特に校閲部の人が赤鉛筆で新聞の文章を細かくチェックしているのがおもしろかった」と目を輝かせていました。　（H･K）

多文化な子ども＠大阪 のニュース　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『 第１１回Wai Wai !トーク　Part １ 』主催：大阪府立学校在日外国人教育研究会(府立外教)

毎年恒例の『WaiWai ！トーク』が今年も6月30日、府立住吉高校で開催されました。府立高校に通う外国にルーツがある生徒が母語で自分の思いを伝えるものです。今回は2,3年生で母語別では中国語12名、フィリピノ語2名、韓国･朝鮮語3名、ポルトガル語1名、ダリ語1名の計19名が参加しました。ある生徒は小学校に編入時、日本の給食を初めて経験したときのとまどい。在日のオモニは来日して以来、苦労を重ねながら子どもを育てあげたあと、子どもの勧めで夜間中学から高校で学び、将来はアメリカに留学する夢をもっていること。また、中国残留日本人の子孫の生徒は、ある研修で在日朝鮮人の歴史を学び、差別されるなかでも力強く生きている人々を知ったことから自分自身のアイデンティティーの揺れを克服することができたことなどの素晴らしい発表がありました。

この行事もすでに11年目を迎えました。『トーク』に参加した生徒はそれぞれ成長し、日本にとどまらず世界中で活躍しています。この『トーク』で発表した卒業生が今年の府外教の研究集会でパネルディスカッションをおこなっています。次ページに掲載しましたので是非そちらもご覧ください。　（Y･H）

多文化な子ども＠大阪 のニュース

『大阪府在日外国人教育研究協議会(府外教)研究集会』

６月23日、大阪学院大学においておこなわれた集会の全体記念講演の講師は、摂津市を中心に民族講師としてご活躍の金生遵さんでした。東京で生まれ育って、実はヤクルトファン。それが大阪に来て阪神ファンの振りをして苦しかったこと、焼きそば、お好み焼き、たこ焼きにご飯を組み合わせてしまう大阪の「日替わり定食」に腰がぬけそうになったこと等、ご自身の体験をユーモアたっぷりに混じえながら、「異文化体験」そして、在日として生きてきたからこそ見えてくる多文化共生社会のあり方を語ってくださいました。在日といってもやはりジェネレーションギャップがあり、二世、三世、四世では、本名や国籍に対する思いが違うこと、そして、在日のたどってきた道が今のニューカマーの人達の状態と重なっていることなど、興味深いお話が聞けました。終了後、会場の聴衆からの割れんばかりの拍手が、印象的でした。

午後は、4つの特別分科会、7つの分科会に別れて、日頃の取り組みが発表されました。第4特別分科会では、府立外教主催の「Waiwai トーク」に出場した6名の卒業生をパネリストとして招き、それぞれの過去、現在、将来にわたる話を聞きました。日本に来てからのこと、高校に入るまでの話、高校時代のこと、高校卒業後の進路のことなど、それぞれの思いを語ってくれました。日本語がわからなくて苦労しながらも、応援し見守ってくれる先生方がいたからこそ頑張ることができたという話に、力づけられました。また会場からは、外国からきて苦労をした生徒達が、立派に成長した姿を見られて嬉しいという声も聞かれました。それぞれにしっかりと自分自身の人生を歩みだした彼ら彼女らに、元気をもらったひとときでした。　　（H・H）

『府外教研究集会特別分科会シンポジウムに参加して』　衣明穂（門真なみはや高校卒業生）

シンポジウムで私が話したことは日本に来た経緯や日本に来てからの苦労話、WaiWai トークに参加した経緯、日本の学校生活で自分に影響を与えていること、またなぜ今の進路を選んだかなどです。その中でもほかのパネラーにはみられなかった私のような幼い頃に日本に来た子どもたち特有にみられる、母語の確立が出来にくいという問題に関しては、参加された先生方からも注目を浴びました。

幼い頃に来た子どもたちというのは発達とともに日本語を習得していきます。ですから表面上はある程度（小学校中学年くらいまで）成長すれば日本語がかなり上達し、まるで不自由ないかのように見えます。しかし、そういった子どもたちは実際のところは出来ているのは表面だけで、自分自身のなかでは確立されていないのです。それは家庭の中と家庭の外という環境の間に温度差とギャップがあるからです。家庭では中国語を話し、外では習った日本語を話す、だが結局どちらも芯まで浸透せず中途半端になってしまう。しかし、それがわかるのは本人だけで、外から見れば日本語が出来ていると思われ日本語支援学級から外す、そうなると勉強にどんどんついていけなくなる。そうした悪循環が学力低下を招くと私は考えます。

実際のところ私のような生徒は少なくないようです。ある小学校の先生から、どうすれば周りが気づいてあげることができるのかという質問をされましたが、私はその確かなる解決策はわかりませんでした。しかし、私の実体験で言えば、私の母語(日本語)が確立されたということを自覚したのは高校に入り母国語(中国語)を勉強するようになってからでした。普段使うことの多い日本語以外の言語を学習したときに初めて自分の母語は日本語なんだということに気づかされました。ですから、母国語を学習する機会に触れさせてみてはいかがだろうかというふうに返事をしました。

私にとってこの研究集会に参加できたことはとても貴重な経験となりました。あんなにもたくさんの先生方が外国人生徒のために尽力されていることを改めて知り、とても心が温まる思いでした。日本にいる外国の子どもたちに関する問題は多く、今回参加された先生方とともにそんな子どもたちの助けになりたいという思いがより一層強くなりました。これからも何らかの形で外国人支援、多文化共生の実現に携わることが出来ればいいなと思います。

メキシコ便り⑥ 『コスタリカ』

（おおさかこども多文化センター会員・金野広美）

冬休みを利用してコスタリカに行ってきました。広さは日本の九州と四国を足したくらいの小さな国で、メキシコからは飛行機で3時間です。首都サンホセは高いビルもなくこじんまりとした街で、ここは朝が早いせいか、夜 10 時をすぎるとひっそりとしてしまいます。

コスタリカは憲法に軍隊をもたないことを明記し、1983 年には永世非武装中立宣言をしました。またこの国はコーヒー、バナナ、ハイテク製品などの輸出とともにエコツーリズムでも有名です。コスタリカには全生物種の5パーセントが生息しているといわれ、国土の27パーセントが保護区や国立公園になっています。自然を生かした観光産業をエコツーリズムという形で推し進め、入場料などから得た収入を自然保護のために活用しています。ここのガイドは英語はもちろん生物学もしっかり学ばなければならないのですが、このガイド協会がガイド料の中から拠出した資金はレンジャーの人件費や、植林などの自然保護プログラムにあてられます。ここでは自然保護と観光産業が相互補完の関係になっているのです。

私はまずケツァールが見られるというモンテベルデ自然保護区に行きました。ここには常に雲と霧に覆われている湿度の高い熱帯雲霧林と呼ばれる密林があります。しかし、私の行った日はとても天気がよく,さわやかな風が猛スピードで雲を流し、湿度の高さは全く感じられない快適さでした。風がゆらす木々がまるで歌を歌っているようにそよぐなかに鳥たちのさえずりがとけこみ、今まで経験したことのない、自然が奏でる音楽に包み込まれた至福の時を過ごすことができました。ガイド見習いで明日から一本立ちするというエステバンが熱心に先輩ガイドのエルビンと一緒に望遠鏡でケツァールを探してくれ、なかなか見ることができないといわれているケツァールに 3 回も会えました。頭が緑で胸が赤、尾が白と青の本当にきれいな色の鳥でした。次の日、入り口で、ガイドの必需品の三脚付き望遠鏡を持ち、ちょっと緊張しながらも誇らしげなおももちでお客を待つエステバンに会いました。私は彼に、コン・アニモ（がんばって）と声をかけ、こぶしを握り激励しました。

次に訪ねたのが、カリブ海に面し、海がめが産卵にやってくるというトルトゥゲーロ国立公園です。ここは高温多湿の豪雨地帯で、毎日のように激しいスコールがあります。ジャングルの中は道がないので、人々の移動はランチャとよばれる小さな船です。ジャングル内は木々の間を猿がとびかい、ワニもたくさん顔を水面に出しながら泳いでいます。河岸の木には、彼らをみつけて騒ぎ立てる観光客をちょっと小ばかにしたような表情のイグアナがじと一と止まっています。

夜、ホテルの船着場でニカラグアから15年前、18歳でここに来て、夜から朝までホテルの船の番をしているというホセ・サントスに会いました。ここトルトゥゲーロの住人は4000人ほどだということですが、ニカラグア人は900人いて、ほとんどホテルのボーイやガードマン、洗濯婦などをしているということでした。コスタリカには隣国ニカラグアの政情不安や貧困を逃れやってきた人が多く、現在430万人（2004年）のコスタリカ人口の約1割弱、不法滞在も含めて40万人以上が暮らしているといわれています。ホセの兄弟はみんなニカラグアにいるそうで、兄弟の話をするホセはとても楽しそうでした。彼が私に「耳をすましてごらん」というので耳をかたむけると、かすかに海鳴りが聞こえてきました。彼は毎日、故郷でも聴いただろうカリブの海鳴りを聴きながら、祖国の兄弟を思い出しつつ、一人で一晩中、船の番をしているのかとおもうと、私はちょっとせつない気分になってしまいました。

海外 にほんご事情

～ベトナム・後編　クラス終了パーティー～

（日本語教師　岡田勝美 ）

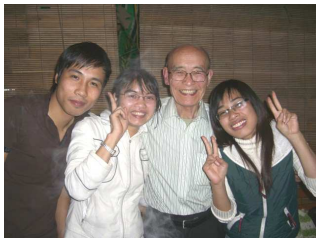
毎年11月20日は「先生の日」だ。 この日は朝から街じゅうの通りにストリートの花屋が並ぶ。 センターの教師室にも各クラスの学生たちが花束を抱えてやってくる。

お礼を言いながら教師に花束を渡し、しばし談笑で盛り上がる。 夕方には教師たちの机は花で埋まる。「先生の日」は他の国でもあるが、ベトナムには他に「女性の日」がありこの日は女性教師に同じように学生たちから花束が贈られる。 花束でなくスカーフなどの装飾品のときもある。 こうしたしきたりに学生たちは実に律儀で決して礼を欠かない。 そこでも彼らはよく相談して花束一つでも吟味してみんなで決めている様子だし、それを楽しんでいる風でもある。

そんな彼らが日本語学習のコースを修了する時、必ず「終了パーティー」を開き、自分たちだけでなく教師たちを招待して盛大にセレモニーをする。これも事前に周到に準備して飲み物、食べ物、セレモニーで教師に礼を言う代表者とそのメッセージなどを決めている。前もって日時は各教師に伝えられていてその日、教室に用意が整うと教師を呼びに来る。型どおりに代表者のメッセージが終わるとあとはクラスの思い出話やサプライズのトピックなどに時を忘れて盛り上がる。クラスによっては教室でなく「ビア・ホイ」と呼ばれる居酒屋レストランで開く場合もある。 どちらの場合もクラスが始まったころ全然コミュニケーションができなくて苦労していた学生たちがそれぞれに上達してお礼を言ってくれるのは嬉しいし何よりも感慨深いものがある。私が帰国直前だったこともあって、さながら私の送別会のようになってしまったことで一層名残惜しい。

彼らはこれから委託企業の職場に入り新たな試練に立ち向かうことになる。彼らの活躍を心から祈っている。

そんな愛すべき彼らだが、ひとつだけ許せないことがある。カンニングだ。どんなに注意しても後を絶たない。答案を採点していると、優秀な学生とできない学生で全く同じ解答が出てきて同じ箇所で間違いをしている。何よりも彼らに基本的にカンニングに対して「罪悪感」がないのだ。 つまり「困っているから助けて」と「隣で困っているのがいたら助けてやる」という意識が双方の根底にある。企業委託クラスでは定期的に学生の成績や学習態度などを企業に報告している。そこでイエローカードやレッドカードを出して報告することもあるが、日本人の人事担当者に届く前にベトナム人の担当者のところで止まってしまったりもする。大学までのベトナムの教育現場でこういう「助け合う」ということが日常化してしまっているのでそこまでで終わってしまうのだ。



一方でそれは、人懐こくフレンドリーな民族性とどこかでつながっているのかもしれない。だとするとそこだけを矯正するのは難しいということにもなる。

あの長く苦しいベトナム戦争を強いきずなで耐え抜き、決してアメリカに屈しなかったベトナム民族の歴史を想いあわせて複雑な気持ちになる。

ベトナムの教育スタイル　～絶対的存在としての教師・非コミュニケーション型授業～

（1）大学のクラス ::　ベトナムでは教師が絶対的な存在となっている。 そのため授業も、教師から学生への一方向の授業スタイルとなっている。授業の内容は文型中心で、それを使う力、すなわち運用力は重視されていない。

（次ページ下に続く→）

多文化な子ども あつまれ！　～地域の子ども支援教室から～ ⑥

『サタデースクール』（富田林市）

富田林には様々な立場の、外国にルーツを持つ人たちが住んでいます。相互に理解を深め、差別や偏見をなくし、彼らが市民として堂々と暮らすことのできる多文化共生の地域社会を作ることを目的として、とんだばやし国際交流協会は活動しています。

毎週土曜日の午後には協会事務所でサタデースクールを実施、ボランティアスタッフと一緒に学校の勉強や日本語の勉強をしています。現在サタデースクールに通っている子どもたちの大半は数年前に日本に来た子どもたちで、日本語の学習をしながら学校の勉強もしなければいけないのです。そんな大変ななか、子どもたちにとって、サタデースクールは「勉強する」ことだけでなく、「母語で友だちと話ができる」ということも大きな楽しみで、教室からは母語で話すにぎやかな声が聞こえてきます。サタデースクールは、学習面のサポートだけでなく、このように子どもたちにとってのひとつの「場」ともなっています。

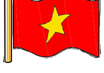
また、そのほかの事業としては、夏休みのはじめの 4～5 日間実施するサマースクールでの学習サポート、「多言語進路ガイダンス」での子どもと保護者への進路相談、キャンプ、ハイキング、吹田の民族学博物館へのバスツアー、クリスマス会などがあり、年間を通じて子どもたちの交流活動をすすめながら、他団体と連携し、子どもたちのエンパワメントと仲間作りの支援を行っています。特にサマースクールは学校で子どもたちが自信を持って生き生きと過ごすためには、文化や生活背景を理解している先生のサポートが重要なので、新任教員研修の機会としても位置づけられています。毎日 30 人ほどの子どもが来るなか、午前中は新任の先生方がサポートしながら学習し、午後は子どものルーツのある国の文化や挨拶を教えてもらったり、遊んだりします。関わった先生は「子どもが学校では見せない笑顔を見せている」と驚かれる事もあります。

子どもたちは地域の未来です。外国にルーツを持つ子どもたちも夢を持って輝いてほしいと願っています。すぐに答えを求めるのではなく、子どもたちが大人になった時に参加してよかったと思ってくれるような、長い目で見ることのできる活動でありたいと思います。　（とんだばやし国際交流協会事務局長　前川仁三夫）

連絡先　住所：〒584-0036　富田林市甲田 1 丁目 4 番 31 号
電話・FAX：0721-24-2622
e-mail：ticc@m4.kcn.ne.jp

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

（→前ページより続き）



その結果日本語の「知識」はあっても「運用する能力」「話す力」は身につかない。かつての日本の英語教育と同じだ。課題は教師の意識改革と日本語の運用能力の向上にある。

（2）一般クラス　：一般クラスの中心は、仕事を持つ社会人や個人的に日本語を勉強する大学生を対象にしたイブニングのクラスだ。 一般のクラスでもベトナム式授業スタイルが踏襲されていて、課題はやはり運用能力の向上と教師の意識改革だ。

（3）企業委託クラス　：「話す力」を求められる企業委託クラスでもベトナムスタイルは根強く、企業の要請に応えきれていないのが実情だ。 最近、それを克服しようとする動きが出ている。パワーポイント（プレゼンテーション用ソフト）を活用したクラス授業用の新教材を開発し、学習者の机の配置もサークル型にして学習者同士のコミュニケーションを活発にしている。 こうした動きが広がってベトナムの日本語教育がコミュニケーション型へレベルアップすることが期待される。

イベント情報～おおさかこども多文化センター主催のイベントです～

▼ 子どもゆめ基金助成事業

『えほんのひろば　～いろんなおはなし、いろんなくにのことば、いろんなともだち！』

日本の絵本・外国の絵本が約 500 冊ずらりと並び、自由に読んでもらえます。おとなも子どもも、絵本を通じて、いろんな国のお友だち・身近な多文化に出会いませんか？　外国のお知り合いも誘ってぜひどうぞ！

日　時　：　2012 年 9 月 8 日（土）、9 日（日）　11:00～16:00（時間内出入り自由）

8 日 14 時:「多言語おはなし会」 外国から来て子育て中のお母さんたちによる読み聞かせ

9 日 13 時:「絵本ってこんなにおもしろい♪」 絵本あれこれ研究家・加藤啓子さんのお話

14 時:「おはなしワークショップ」 みんなで一緒にタイ語でお話上演体験！

両日とも「世界の文字で名前を書いてみよう」のコーナーもあります。

場　所　：　大阪市立中央図書館　5階　大会議室（大阪市西区北堀江 4－3－2）

地下鉄千日前線・長堀鶴見緑地線「西長堀」駅7番出口すぐ

参加費　：　無料（だれでも参加できます。申し込みも不要です）

後　援　：　大阪市教育委員会　　主　催　：　おおさかこども多文化センター

▼ キリン福祉財団助成金事業

『日本語を母語としない親子の社会見学』

母語とやさしい日本語を通じて、生活に必要な情報を正確に知ることや、親子と一緒に同じ体験をすることで、親子の会話を楽しむことなどを目的とした企画です。第3回目はインスタントラーメン発祥地の大阪府池田市にあるインスタントラーメン発明記念館。ラーメンの好きな親子のみなさん！どうぞご参加を。通訳もつきます。参加希望者は必ず申し込んでください。

日　時　：　2012 年 10 月 21 日（日）、　12:30～15:30　　阪急池田駅に12時に集合

場　所　：　インスタントラーメン発明記念館（池田市満寿美(ますみ)町　8-25）

参加費　：　無料　　申し込みできる人　：　日本語を母語としない親子　12組（先着順）

主　催　：　おおさかこども多文化センター

参加を希望される方は Mail か TEL、FAX で申し込んでください。

Mail　：　osakakodomo@gmail.com　　TEL/FAX　06-6586-9477

担当者　：　橋本（はしもと）、安田（やすだ）、村上（むらかみ）

NPO 法人 おおさかこども多文化センター

代表　村上 自子

〒550－0005 大阪市西区西本町 1-7-7 高砂堂ビル 8 階

Tel / Fax　06-6586-9477

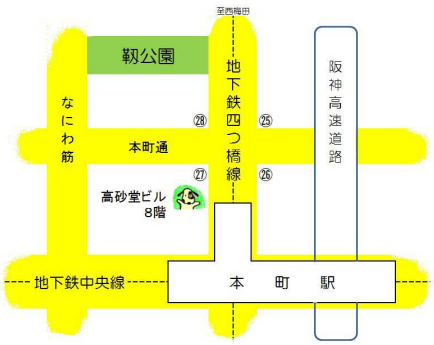
E-mail　osakakodomo@gmail.com

URL　http://www.osakakodomo.sactown.jp

郵便振替　【記号・番号】00940－1－272824

（他金融機関からは【店名】〇九九（ｾﾞﾛｷｭｳｷｭｳ）【店番】099

【預金種目】当座【口座番号】0272824）

口座名義『ＮＰＯ法人 おおさかこども多文化センター』

〔ﾌﾘｶﾞﾅ：トクヒ）オオサカコドモタブンカセンター〕